

## <巻頭言>



### 次世代に引き継ぐこと

渡 辺 和 足\*

元国土交通省技監，現在財団法人国土技術研究センター理事長の大石久和氏が「国土学事始め」という著書を刊行された。この本の中で氏は「私たちは，国土に働きかけて，不毛であった大地を肥沃な土地に変え，あるいは河川を付け替えて耕地を生み出す努力を，江戸時代のはるか以前から続けてきた。しかしながら，今日わが国では財政事情が厳しいということからそんなことをやる余裕がないのではないかといった議論がほとんどを占めている。過去の人々の努力の成果の上に生きているのを忘れていないかと思えるほどに，私たちは将来の人々に対して怠慢になっているのではないか。」と述べている。

また大石氏が尊敬し，影響を受けている文化勲章受賞者小泉信三氏も「平生の心がけ」という書の中で「吾々はこの日本の国土を，祖先から受けて，子孫に伝える。鷗外が生まれたままの顔を持って死ぬのは恥だ，といったと同じように，吾々もこの国土をわれわれが受け取ったままのものとして子孫に遺すのは，恥じなければならぬ。（中略）この国土の山川草木を，受け取ったそのままの形で，子孫に遺すのは不真面目なことではないか。吾々はそれを前代から受け継いだよりも好いものとして，これを次代に引き渡さなくては済むまい。」と述べている。

現在，私達は利根川が銚子で太平洋に注いでいるのが当たり前になっている。しかしこれは，江戸時代に徳川家康が始めた利根川東遷事業により東京湾に流れていたものを付け替えたものである。東遷事業の目的は江戸の水害防止，埼玉平野の新田開発，東北地方から江戸への舟運などである。現在東京がこれだけ発展したのも，江

\* 前 国土交通省 河川局長

戸時代に行われた利根川東遷事業の成果の恩恵といっても過言ではない。

利根川以外の日本の大河川を見ても、下流部は放水路や、大規模な引き堤であるケースがほとんどである。石狩川、北上川、荒川、淀川、太田川、吉野川など日本の大河川は例外なく放水路である。信濃川にしても新潟市を流れる部分は放水路でないが、上流で関屋分水路や大河津分水路などで洪水を分派している。

日本最古のダムといわれる大阪の狭山池は、古事記や日本書紀にもその名前が登場するがその築造は、約1400年前の7世紀前半といわれている。また日本最大のため池といわれる香川の満濃池も8世紀初頭に築造され、すでに1300年の歴史を刻んでいる。満濃池については9世紀に弘法大師（空海）によって修復がなされたこともよく知られている。これらの施設は、現在でもその機能を十分に発揮しており、先人の築いた貴重な財産を受け継いだものである。

ダムに対しては様々な意見がある。環境に対する影響が大きい、無駄な事業である等批判が多いのも事実である。しかし、利根川の上流ダムや小河内ダムがなかったら東京の水道はどうなっていたか、黒四ダムがなかったら関西の電力がどうなっていたか、早明浦ダムがなかったら四国の洪水・濁水はどうなっていたか、松原・下笠ダムがなかったら筑後川の洪水・濁水がどうなっていたか。みな先人が築いてくれた財産の恩恵を享受しているのである。

現代に生きるわれわれがなすべきことは、次代の人たちにしっかりと国土を引き継ぐことにある。そのために今何をなすべきかを見据えて、卑しくも次代の人たちに後ろ指を指されることだけは無いようにしたいものである。